



Title	近代中日両国における対外認識の比較研究：郭嵩燾と横井小楠を中心として
Author(s)	王， 賓
Citation	大阪大学， 1994， 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/39091
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	王 賓
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 1 6 0 8 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 6 年 1 2 月 6 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条 第1項該当 文学研究科 日本学専攻
学 位 論 文 名	近代中日両国における対外認識の比較研究 －郭嵩焘と横井小楠を中心として－
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 廣 田 昌 希 (副査) 教 授 子 安 宣 邦 教 授 加 地 伸 行

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日中両国の儒家知識人である郭嵩焘（カクスウトウ）と横井小楠とをとりあげ、19世紀中葉の西洋の衝撃のもとで、彼らがどのような思想的格闘を経て新しい対外認識を形成していったかを、比較・検討したものである。ちなみに、この二人は当時の儒家知識人の中で、西洋近代文明を最も理解しえた思想家として、日中の研究者から高く評価されている人物である。本論文は、序章と終章と本文三章から成り、B5判総頁数で226頁（うち注釈26頁）、400字詰原稿用紙で483枚に相当する。

序章「本稿の課題と研究の視角」では、郭嵩焘と横井小楠に関する先行研究を批判的に整理しつつ、論者の課題と視角を提示する。

郭嵩焘（1818～91）は、清朝の初めての駐英公使として有名であるが、彼の西洋認識は「四つの現代化」運動を推進している中国大陆において高い評価をえている。李鴻章らの洋務派に理論的根拠を与えたという批判もあるが、洋務派たちの認識をはるかに超える西洋認識を示したという評価が一般である。台湾の研究者もそれを評価するが、日本の研究者とともに、儒教の伝統的な重みや限界についての指摘がみられる。横井小楠（1809～69）に関する日本での研究はゆたかであるが、その多くは西洋近代文明を儒教によって理解しえた点での高い評価である。ただ一部の傾向に、西洋近代とは異質な文明を生む可能性があったことを指摘する研究がみられる。

先行研究をこのように整理した論者は、そこに理念化された西洋近代を尺度にして中国と日本の近代化を裁断しようとする傾向が支配的であり、逆に儒教そのものに可能性をみようとする一部の傾向は無限定な評価となり、ともに問題があると批判する。論者は、思想家が時代と格闘するなかで思想を変化させていくことを、対象に内在して明らかにすべきだと主張し、その視点から、西洋の衝撃が彼らの儒家思想にどのような変化をもたらし、それがどのような対外認識を生みだしたかを明らかにすることを本論文の課題とすると述べる。

第一章「郭嵩焘と横井小楠の時代認識」では、二人の思想の展開過程を時期区分しつつ、その時代認識が彼らにどのような思想転換をもたらすかを考察している。すなわち、第一節と第三節でそれぞれの生涯を対外認識との関連で

時期を区分し、彼らの思想形成がそれまでの儒教思想とどのように関連しながらはかられていったか、その知的関連が検討される。第二節と第四節とでは、そうした思想形成において西洋の衝撃が重要な意味をもったことから、その時期を中心に検討し、その衝撃によって思想転換をはかることができ、かつ現実の政治体制を相対化することができたことを明らかにし、そこに二人の共通性が認められるとする。二人は、「三代の治世」（横井小楠）や「三代の聖人」（郭嵩焘）を理想化することで現実の政治体制を相対化し、その根本的変革を求めて、変革主体に「有徳の君主」を見出した。この点は二人の最大の共通点であるとともに、清朝中国の洋務派や幕末日本の儒学開明派との決定的な相違点であったと指摘している。

第二章「郭嵩焘と横井小楠の儒学思想」では、根本的変革を求める二人が儒教思想をどのように読みかえて思想的武器として鍛え直していったかを検討する。郭嵩焘は変革主体として有徳で強力な君主の出現を希求した。「有徳の君主」を求めるのは儒家の常であるが、彼は伝統的な朱子学をふまえ、かつその批判的吟味を通じて、「有徳の君主」の内容の転換をはかるのである。彼は伝統的な朱子学の『大学』理解（大人の学）を斥けて、『君主の学』の書として読み直し、さらに朱子を批判しつつ、『大学』を「誠意」と「格物致知」によって「明德」「新民」（「親民」）の「実功」をもたらすための書だと主張する。彼は君主にとって「誠意」が最も重要であるとし、その「誠意」を「行」とも規定し、あるいは「誠なる者は、自ら成るのみに非ず、物を成す所以なり」として、その概念に主体的実践的な性格を付与するとともに、「物を成す」ところの「実功」がなければ駄目だとする。つまり、「誠意」は、「明德」「新民」の「実功」をもたらす君主の主体にとって不可欠なものであり、実践的であるとともに「実功」があるかどうか検証されるものとして意味づけられるのである。他方「格物致知」については、朱子が「格」を「至る」と解釈したことを受け継ぎながら、そこには「度る」という意味もあり、「二義を兼」ていると独自の解釈を行う。彼は朱子の主知主義的な側面を継承しながらも、「物の情を度る」ことの重要性を指摘することによって、君主が社会や民の実情を推し測って、それに適合的な政治的変革（礼と制度の改革）を行うことを求めるのである。つまり「格物」を君主が政治の実践において従うべき論理であると彼は読みかえたのだと指摘する。そして「誠意」なき「格物致知」も、「格物致知」なき「誠意」も、時代の役に立たぬとする。朱子が君主個人の修身の延長線上に治国平天下をみ、それを「絜矩の道」としたのに対し、彼は君主の修身だけでなく「人の宜しきに適ふ」必要を説き、そのための「誠意」と「格物致知」をもつことを君主に求め、それを「絜矩の道」とした。朱子からの転換である。

郭嵩焘はこのような儒教思想の転換をはかることによって、君主への上奏文においてもきわめて実践的な提案を次々にすることになる。論者はそれら上奏文を分析し、提案の中心は人材登用と経済政策にあるとし、人材登用では道徳的な人格者で実学を身につけた人物の推挙、その実学の内容は西洋の科学をも包括した性格をもつものであること、経済政策では、儒教における伝統的な抑商的立場をはなれて商業を重視し、一定の商人の自主性を認めながら、結局は商業利潤を国家の富国強兵に吸収しようとしたものであることなどを明らかにし、彼の儒教思想の転回がもたらした経世論であることを論証している。

横井小楠の場合は、儒教そのものの理解に関する体系的著作はないが、その経世論や書簡から儒教思想の転回をはかったことが論証できるとする。彼は幕末の危機に直面して、その解決の方向を「三代の道」に見出すが、それは「山川海に地力人力を加え民用を利し人生を厚うする」ことで「自然の条理」を実現することだと意味づける。彼は「宋の大儒」を批判して、「専ら性命道德上に説くのみにして天人現在の形体上に就て恩惟を欠くに似たり」とし、「格物致知」を「現在の形体」を明らかにして「利用厚生」の道をはかるための「実学」と位置づけるのである。さらに彼は、「格物致知」の基礎に「誠意」が必要だが、「今日の学者」にそれがないと批判する。「誠意」は「誠の思い」だが、その「思い」によって理解すれば物事の理は「皆我物」となり自由自在となるというのである。ここにも郭嵩焘と同じく、現実変革のための能動的な主体の形成に「誠意」が求められているのである。しかし、具体的な経世論においては、郭嵩焘が商業を重視するのに比べ、貿易とともに生産力の発展を重視しているところに、二人の相違があると指摘する。

第三章「郭嵩焘と横井小楠の対外認識」では、二人の対外認識を儒教思想との関連において考察している。

郭嵩焘については、渡英前、渡英過程、滞英期と区別しながら、初めは西洋を夷狄視していたが、第2期に上海や

北京で西洋人と接触するなかで、西洋人に礼があり学問があること、西洋は商業立国の方針にもとづき利を求めて東洋に來ているがそれは礼をもって行おうとしていること、中国と西洋との紛争は礼を欠く中国側に責任があるといった認識を形成していたと指摘する。第3期の渡英過程は英植民地を見ていくことになるが、そこでのイギリスのありかたに中国よりも優越している点を認識、その植民地支配のありかたも肯定的にとらえていると論ずる。公使として滞英した第4期は、彼の精力的な観察調査活動、物質文明の高度さだけでなくそれを支える精神文明への洞察力、などを指摘しつつ、政治論・教育論・キリスト教論などにわたって、その認識のありかたを分析、ついに彼は儒教思想をもってイギリス人の中国認識と同じ中国停滞論をとるにいたり、「西洋有道・中国無道」とし、西洋は「三代の聖人」よりも優れていると評価する。そして、日本に対しては渡英前は海外膨張の野心をもつと警戒していたが、イギリス留学の日本人と接するなかで日本の文明開化を評価するにいたる。日本がそのように「功」をえたのは君主が率先して変革に当たり、軍事だけでなく政治・教育・経済ことに商業に力を入れたからであり、彼の変革論を日本が実践したからだとする。そして他のアジア諸国にはそうした君主がいないし、人材も少ないから後れているとして、日本を手本にすべきだというにいたるのである。この過程で彼は君主だけでなく士大夫・官僚層の自己変革の必要も強調しはじめたとのべる。

横井小楠は、「三代の道」を基準にして西洋を観察し、彼も初めの夷狄観を転回して、高く評価するにいたった。彼が積極的に開国を主張するようになるのは、西洋に「仁政」があり、「天地公共の道」が実現されていると判断したからである。西洋の優越性を、佐久間象山はその軍事力にみたのに比べ、横井小楠はその政治・社会・文化にみたところに決定的な相違があり、そこに彼の儒教思想の転回があると指摘している。しかし、まさにその点から彼の西洋批判も生まれるのである。彼はのちに西洋列強の対外侵略の実情を知るに及んで、西洋には「至誠惻怛の仁」がないと批判する。「三代の道」の「仁」の理念こそが彼の対外認識を支える基盤なのである。そこに横井小楠がもつ儒教の可能性への評価も生まれるのであるが、彼のアジア認識、事実上は中国認識を検討すると、西洋に「仁」があると肯定的に評価していたときに、西洋に侵略される中国を「不仁」の国とみなすという態度がみられ、「仁」の立場に立つことによって西洋帝国主義と同じく自己を普遍化し拡大していく可能性もうかがうことができるのでないかと指摘している。

終章「総括」では、郭嵩焘と横井小楠の儒教思想の転換とそれからもたらされた対外認識の特徴について、二人の異同点を整理し、二人の対外認識にはそれぞれに問題はあるが、西洋近代をはじめは「夷狄」として排撃し、次にはその「力」（軍事や技術）を認めるに至った段階から、儒教文献の新しい解釈を行うことなどを通じて、さらに飛躍し「文明」としてとらえることができた点を高く評価し、そのことによって儒教が東アジア以外の世界に開かれ、西洋文明との交流が可能となったこと、すくなくともその交流を介して新たな儒教の展開の可能性を示すことになったことを指摘して本稿を終えている。

論文審査の結果の要旨

本稿は、日中両国の儒家知識人の対外認識を問題としたものである。19世紀中葉に西洋の衝撃を受けた日中両国の儒家知識人が、その伝統的な儒教思想によって西洋文明をいかに理解しようとしたかをみる場合、郭嵩焘と横井小楠とをとりあげることは、二人ともそれぞれの国の先行研究において、西洋文明理解の到達点を示した思想家として評価されてきた点からいっても、妥当な撰択とみなすことができる。

二人に関する先行研究はゆたかである。郭嵩焘に関しては、ことに「現代化」政策以降、中国では注目を浴びて高い評価をえている。しかし、中国のみならず台湾・日本においても、先行研究のほとんどは西洋近代文明をいかに理解したかという点に集中していて、なぜ儒家知識人が理解しえたのか、そのためには儒教思想そのものをどのように変革しなければならなかったのかという点に関心が向けられていない。のみならず儒教思想を問題にする場合、それは朱子学一般と同一視されてきた。したがって本稿がその問題に焦点を当てたのは的確であったといえよう。そのよ

うに問題をたてることによって、先行研究がとらわれてきた西洋近代を基準として歴史をみようとするオリエンタリズムの傾向に対して批判的視点をもつことができたからである。横井小楠に関しては、日本における先行研究は有数の研究水準の高さを示している。しかし、ここにあってもオリエンタリズムの傾向は圧倒的であり、その傾向に批判的な一部の研究は逆に横井小楠の儒教思想がもつ可能性について無限定な高い評価を下すことになっている。本稿は二人を比較することによって二人を相対化し、その時代の儒家知識人がもった思想的営為を歴史的に描き出すことに成功し、先行研究の空白を埋めるとともに、先行研究がとらわれていた枠組を組みかえようとした労作である。

次にその主要な成果についてのべたい。

第一に、二人の思想をその変化にしたがって時期区分し、時代と格闘する思想的営為を明確に描き出したことである。いくつかの先行研究には時期的な変化にふれるものもあるが、二人の生涯を全体としてとらえ、変化する姿を提示したのは本稿が初めてである。

第二に、郭嵩焘の儒教思想を、先行思想との関連を検討しながら、かつ内在的にその変化をたどることによって、これまで儒教思想として一色にとらえられていたことを批判し、朱子学からの質的な転換の構造とその意義を明らかにしたことである。これは日本の儒教研究の蓄積を背景としながら論者の独自の分析が加えられたもので、郭嵩焘研究では初めてのことであり、かつまた中国の儒教研究にも衝撃を与えるであろう。中国では進歩か反動か、愛国的か売国的かのイデオロギーで思想を裁断する傾向が強いが、このように思想に内在して緻密にその構造を分析することによって、思想の独自の営みの意味が明らかになるだろうからである。たとえば、郭嵩焘や横井小楠において重要な概念である「誠意」はきわめて主観的な性格をもっていて客観的でも合理的でもないが、まさにその主観性を踏み台にしなければ新しい次元の合理性を獲得できないところの、変革主体の形成の論理の分析は、歴史的な状況と関連させて説得的であり、研究水準を引き上げたといえるであろう。

第三に、先行研究がオリエンタリズムにとらわれて、19世紀中葉の日中両国の対外認識を問題とする場合、もっぱら西洋文明認識をとりあげてきたことに異議を申し立て、西洋認識とともにアジア認識を問題としたことである。アジア認識の問題は、日本では近年問題とされはじめたからそれ自体は本稿の独自性といえないが、郭嵩焘と横井小楠とを比較して問題にするのは初めてのことであり、数少ない史料からこの二人のアジア認識の特徴を抽出し分析することによって、二人の西洋認識を相対化し、郭嵩焘についてはいうまでもなく、日本の横井小楠研究にも一石を投じた意味は少なくない。

第四に、こうした比較の作業によって、両者が西洋文明を理解するにあたって、驚くほどに共通した思想的転換の軌跡を描いている点を明らかにしたことである。これまで中国と日本の近代化の差異があまりにも著しいので、両者の相違点が強調される傾向が大きかったが、こうした共通性の確認は、近代における儒教を考える上で重要な意義を有するであろう。

もちろん本稿にも問題点や残された課題はある。「誠意」や「格物窮理」の概念は、本稿の文脈にかぎれば基本的には妥当すると思われるが、儒教研究の蓄積をさらに渉猟することによって、いっそうゆたかな内容をもたせることができたであろう。たとえば、朱子学のみならず陽明学との関連をふまえて、歴史的に位置づけたならば、それら諸概念の転回の意味はいっそう明らかとなったはずである。またその内在的理解の方法をもっと徹底させていたら、最後のところで横井小楠の「仁」思想に「帝国主義の可能性」をみるという、後代の意識で読みこむこともなかったであろう。残された課題としては、郭嵩焘や横井小楠以後の儒教の問題、他のアジア諸国の儒教と近代との関係も検討する必要がある。そのもとで儒教と西洋近代との関係は全体的に問題にされるだろうからである。しかしこうした点は、本稿の意義を少しも損なうものではない。本審査委員会は、本稿が学位請求論文として妥当であることを認定するものである。